11/17/2009

＊キリスト教学特殊講義＊＊＊＊

S.　Ashina

＜前回＞　後期オリエンテーション

Ⅲ　東アジアの近代化とキリスト教思想

オリエンテーション

１．「アジアのキリスト教」研究をめぐる方法論的考察

１－１：研究状況と問題点

１－２:「アジアのキリスト教」の問題構造

２．「アジアのキリスト教」の諸問題

２－１：近代化・貧困・開発

２－２：伝統的宗教文化と家族

２－３：ナショナリズム　11/17

２－４：宗教的多元性と宗教間対話　12/1

1/12

Exkurs　ティリッヒ研究１　12/8

ティリッヒ研究２　1/5

１．「アジアのキリスト教」研究をめぐる方法論的考察

２．「アジアのキリスト教」の諸問題

２－１：近代化・貧困・開発

２－２：伝統的宗教文化と家族

（1）アジア的伝統から

・アジアの伝統＝宗教文化

・「問い」に注目する

↓

問いとしての家族

宗教的基盤としての家族、家族の変容と危機

（2）先祖崇拝あるいは習俗

・先祖崇拝は、迷信・呪術？

・習俗としての宗教（土肥）

「キリスト教が習俗化していくことはキリスト教の退廃といわねばならない、と唱える人びともあるだろう。そういう人たちがよく引き合いに出すのは、仏教のことである」、「キリスト教も他宗教の儀礼をとりこんで自己の充足をはかり、その宗教的心情と競合して自己の存在を明らかにしていった」「欧米社会では習俗化した、といえないだろうか」(71)、「彼らも腹の底から物事がわかるには、習俗を媒介することが少なくないと、思われるのである」「キリスト教がある特定の社会に土着する場合、それが習俗化していくことは避けられないし、またこれを避けてはならない。問題はどのようなものをどのようにして習俗としていくか、である」、「建国記念の日」「結婚式」(72)、「キリスト教がある異質的文化に土着していくことは、その中に自己をうずめるようにみえて、その奥深くに浸透し、やがてその文化をうちより変革していくこと、そこから新たな文化を創造していくことを意味する」(73)

（３）家族再考から見る「アジアのキリスト教」

・聖書・キリスト教的な家族

空間的・領域的な家族概念

家族のメタファー化：血縁から精神的絆（「神の意志」の規範的な共有、あるいはイエスとの規範的な関係性の共有）へ

「家族とはだれのことか」「家族になる」

・東アジアの家族と儒教的伝統・宗教文化

・加地伸行「それは、＜血脈＞あるいは＜血の鎖＞と言ったもいい」「孝の行ないを通じて、自己の生命が永遠であることの可能性に触れうるのである。つまり、そう考えれば、死の恐怖も不安も解消できるではないか」「これは漢民族に対する死の説明として最もよく整ったものとなっているのである」「生命論――これが孝の本質である」(21)

・東アジアにおけるキリスト教の可能性としての家族（地平融合の場として）

世代と生命の連続性

↓

諸世代を包括する共同性＋血縁性の拡張的克服

２－３：ナショナリズム

（１）儒教的伝統：家から国家へ

１．森岡清美『家の変貌と祖先の祭』日本基督教団出版局、1984年。

「なぜ家は内生的な宗教性をもつのであろうか」、「まず、家は一代限りであってはならない」「家の宗教性は、第一に先祖祭を核として出現したといえる」、「家永続の願い」(13)

「葬後儀礼の定着過程」(14)、「仏教が中国に伝えられて」「合わせて十仏事となった」、「中国から日本へ」「七回忌、十三回忌、三十三回忌が追加され、十二―十四世紀に十三仏事が完成した」(15)、「葬後儀礼が、仏教各宗によって庶民布教のために採用され、庶民の生活のなかに普及定着した。この上に江戸初期の宗門人別改の制度が網のようにおおいかぶさることにより、寺檀関係が制度的に固められた」、「家の永続性を期しえない下層民でも、子供の一人は親と終世同居するという家族生活のあり方により、追善行事が世代的に累積し、家の宗教性を確かなものにした」(17)、「累代同居」(18)

「キリスト教との葛藤」「キリスト教と家・地域の宗教あるいは宗教的世論との力関係による」(24)

「家の宗教性の根強い底力にもかかわらず」「日清・日露の戦役を経て」「都市に核家族形態の新しい世帯」「結果、家の宗教性も衰退の兆しを見せた」(26)、「先祖祭祀の衰退傾向は、第二次世界大戦後、誰の目にも疑いえないものになっている」(28)、「家の変化」「親子中心の家から夫婦中心の現代家族への変化」(31)

「十三仏事がすたれても、何らかの儀礼は残る」「子孫がいる限り」(34)

「信教自由の主張が言論界および政府高官の間で話題になるにしたがい、葬祭の依頼先にも慣行にしばられない自由度が加わっていくのは自然の勢い」(54)

「信仰によって帰依する相手方に葬儀を依頼してもよいことになり、個人単位の葬所帰属も認められるとなると」(55)

「明治七年段階の同様に同一家族になかに宗旨の違う者がいる事態を不都合にみなかったのである」(57)

「明治十年」「氏神帰属は信仰でなく居住に地域によって客観的機械的に決定されるという、この頃確立され来った原則」(59)

「戸籍簿から社寺名削除」「明治十七年」「太政官布達（第一九号）」（63）

「重層的な祖先観」「近世以前の豪族名家の系図に現われる「伝承的」もしくは「擬制的祖先観」と、近代の家族国家観の基礎とされた「抽象的なイデオロギー的祖先観」（108）
「「祖先教」とは、明治中期から後期にかけて活躍した法学者穂積八束（一八六〇―一九一二年）が好んで用いた語である」「祖先教とは、わが国近代の国家権力が民衆に示し、民衆に受容と実践を迫った、祖先を介して家と国家を結びつける信念体系である」（109）
「国家権力が掲げる公的な信念体系は、近代日本においては天皇の詔勅に端的に示された」「「臣民の先祖」にも言及」「先王の道とアナロジーにおいて皇祖皇宗をとらえ、天皇の統治は権力的支配にあらず徳化であることを強調」「この支配が家父長的な伝統的支配であることを意味し、支配の温情主義的な性格を強調する」、「天皇家の祖先に言及する詔勅が頻発された時期は」「政治上の危機であった」（110）
「政治学者の研究によれば、いわゆる家族国家観が十全な形で公的に登場するのは、明治四十三年（一九一〇年）使用開始の第二期国定教科書高等小学第三学年用修身書においてであった」（112）、「「わが国は家族制度を基礎として国を挙げて一大家族を成すものにして、皇室は我等の宗家なり」」、「家族国家観とは、集団としては国＝一大家族、したがって関係としては「皇位と国民」＝「父母と子」、また皇室＝国民の宗家、基本的倫理としては忠孝一本、という観念を含むものである」、「この修身書の修正を部長として担当した東京帝国大学法科大学長穂積八束は、わが国家族制度および建国の基礎に祖先教があり、これによって国家の倫理を維持して来たという」（113）
「しかし、祖先と家との関係はほとんど自明であるのに対して、祖先と国との関係は何ら明らかにされていない」（114）、「祖先と国との関係については論理的な説得力を欠く」「にもかかわらず、というよりはそれだからこそかえって（というのが正確であろう）、家族国家観を情動的に支持しえたことは十分考えられる」（115-116）
「指導者と大衆との情的結合が強調」「温情主義の登場」「不適切であるにしても、精神的基礎すなわち祖先祭祀の強調は可能であるのみか必要であった。これを支えとして、家族国家観を媒介して、情誼的一体の関係の開発が、本来権力的である立憲君主と国民の間にも企図されたのである。「祖先教」が公教育にとりこまれた時代の社会的背景がここにある」（128）
「祖先教の宣伝にもかかわらず」「果たして祖先祭祀を復興させ、思想的宗教的に家を強化しえたかはきわめて疑問であるといわねばならない。それに、国のため戦場で生命を捨てたならば、家の祖先祭祀を廃滅させる危険があるという関係、つまり家族的祖先敬慕と国民的祖先敬慕の間には鋭い矛盾があることは、祖先教で隠蔽しおおせるものではなかった」（131）

依田精一「日本ファシズムと家族制度」
金原左門「家と村の国家のイデオロギー」
佐々木潤之介編『家族と国家』（日本家族史論集３）、吉川弘文館、2002年。

（２）民族と国民国家

２．近代国民国家

大澤真幸『ナショナリズムの由来』講談社、2007年。

「近代初期の、すなわち十九世紀から二十世紀前半のナショナリズムは、多様で散乱せる身体の集合――ハートとネグリならば「マルチチュード」と呼ぶだろう――を国民化していく運動であった」「人々は、部族や「民族」の直接の紐帯から引き剥がされ、国民-国

家の市民として抽象化される。それに対して、現代の、つまり二十世紀末期以降のナショナリズムの運動を規定しているベクトルは、これとは逆を向いている。それは、国民を、共同体のより小さな単位、「民族」という単位へと分解していく運動である」「現代のナショナリズムは民族化を指向している」（大澤、2007、25）
「産業化のある段階までは、ネーションという文化的な単位が、単一の主権が及びうる政治的な単位と合致していることが、きわめて高い経済的な価値をもっていたように見える」「古典的な近代」「ある時期までは、主要なメディアが情報を収集したり、情報を発信したりすることができた領域は、主として、ネーションの範囲だっただろう」（26）、「古典的な近代の段階にあっては、「国民」を有意味で機能的なものとして支持する――ようにう見える――多様な要因があった」「均質性についての幻想が成り立つ共同体を構成すれば、それは「ネーション」になったのだ」（27）
「民族やその他の小共同体への執着は、偶有的な意味しか、つまりは「ゴミ」としての意味しかもっていないように見えてくるのだ」「「ゴミ」である民族への「回帰」が、現在、〈帝国〉の主権がまさに確立されつつあるのと並行して生じているのはなぜなのか」（28）
「第二インターに集う社会主義者たち」「最も普遍主義的な理念に立脚していた者たちが、特殊主義へと反転した。それは、レーニンをひどく驚かせた」（30）

「現代における最も普遍主義的な社会思想は、多文化主義 multicultualism の形態を取るだろう」（30）「文化多元主義 cultural pluralism と対比」、「文化多元主義は、私生活の多様性を認めるところに主眼がある。それは公的な領域に関しては、それを――私生活の多様性を保証するためにも――統一的、一元的なものとする。それに対して、多文化主義は、公的な領域そのものの多様性・多元性を要求する。多文化主義は、文化多元主義が多様な生活様式への寛容を訴えつつ、実際には、公的な生活の一元性を保存し、擁護することの欺瞞と不徹底を批判するのだ。言い換えれば、多文化主義は、公的な領域と私的な領域との厳密な分割が不可能になったときに出てくる思想である」
「強い「普遍性」の擁護者である多文化主義は、ナショナリズムへの有効な批判的立脚点をなしているように思える。だが、実際には、多文化主義は、現代のナショナリズムと厳密に連動し、共振しているのである」（31）、「多文化主義は、文化多元主義の不徹底や欺瞞を批判する。その批判は正しいのだが、多文化主義が文化多元主義より優れているという判断は、どこかある国民が他の国民を搾取するよりは、全員が搾取されたのうがよい、という判断と等しいかもしれないのだ」（34）、「国内市場中心だった資本主義が外的に拡張したときに登場する帝国主義に、そしてまたそれをイデオロギー的に補佐する文化多元主義に、ナショナリズムを――帝国主義本国を優遇するナショナリズムを――嗅ぎつけることは容易である。だが、もし文化多元主義や帝国主義がナショナリズムに支えられているのだとすれば、多文化主義も、劣らずそうであると見なすべきである」（34-35）
「反人種主義」「文化的な諸差違の深刻な規定性を強調し、互いの間でのそれらの諸差違の尊重を奨励することにおいて、（原理的には可変的であるべき）諸差違の可塑性には限界があることを承認したことになる。そうであるとすれば、文化的な諸差違は、生物学的な差異に劣らず本質主義的であり、事実上、「人種」を定義しているに等しいことになるだろう」（35）、「それぞれの文化の（多文化主義的な）「尊重」は、結局、互いの接触による摩擦を極小化すべく、それぞれの共同体の生存の場を相手から隔離することを意味するだろう。ところで、これこそは、最悪の人種主義とされたアパルトヘイトと同じことではないか。事実、現在、「セキュリティ」の確保を目的として、アパルトヘイトと見紛うような共同体の隔離が、（とりわけ「先進国」の）至るところで構築されている。つまり、人種主義の多文化主義的な相対化は、一巡して、最悪の人種主義と同一の事態へと回帰す

るのである」（36）
「ゴミのような「ネーション」への拘泥と、普遍主義への道を拓くかにみえる〈帝国〉の平滑空間との間には、何らかの繋がりがある。そのことをわれわれに確認させるのは、アメリカ合衆国のナショナリズムである」（37）
「ネーションやナショナリズムは、十八世紀末から十九世紀にかけて、広義のヨーロッパ――「新世界」の植民地を含むヨーロッパに――成立した。とはいえ、同質的な文化の範囲と領土主権国家がほぼ合致するという現象は、西ヨーロッパでは、これに先立つ絶対王政期に、すでにある程度認めることができる」、「そこで、われわれは、ナショナリズムの成立を、二つの段階に分けて捉えることにした。絶対王政期（十七―十八世紀のヨーロッパ）に、ナショナリズムの前駆的な実現を見ることができ、ついで、十八世紀末から十九世紀にかけて、その本来的な実現を認めることができる。」（大澤、2007、396）

３．塩川伸明『民族とネイション――ナショナリズムのいう難問』岩波新書、2008年。
「エスニシティ」「とりあえず国家・政治との関わりを括弧に入れて、血縁ないし先祖・言語・宗教・生活習慣・文化などに関して、「われわれは○○を共有する仲間だ」という意識が広まっている集団をさす」「そうした主観がかなりの範囲の人々に広がるなら」（3-4）
「エスニシティを基盤にし、その「われわれ」が一つの国ないしをそれに準じる政治的単位をもつべきだという意識が広まったとき、その集団のことを「民族」と呼ぶことにする」（6）
「「国民」とはある国家の正統な構成員の総体と定義される。近代社会における国民主権論と民主主義観念の広まりを前提すれば、国民とはその国の政治の基礎的な担い手ということになる」（7）
「ネイションにエスニックな意味合いが色濃く含まれている場合には「民族」、ネイションがエスニシティと切り離して捉えられる場合に「国民」とする」（9）
「区切りの難しさ――恣意性と固定性」
「英語のネイション／ナショナリティやフランス語のナシオン／ナシオナリテは、エスニックなニュアンスがあまりなく、「民族」より「国民」の方に近い」（14）
「ドイツおよびロシアでは、ナツィオーン／ナツィオナリテート（独）、ナーツィヤ／ナツィオナーリノスチ（露）の語にエスニックな意味が色濃く付着している」（15）
「概念上の問題」
「ナショナリズム」
　「ある民族の分布範囲と国家の領域との関係」「両者の大小関係を基準」として「四つの類型」
「パトリオティズムとナショナリズム」
「「民族」の捉え方をめぐる対抗図式」
　歴史解釈に関する「原初主義」と「近代主義」、運動の原動力の解釈としての「表出主義」と「道具主義」、哲学的な認識論の次元での「実在論」（本質主義）と「構築主義」（29）
「「国民国家」の前提条件」「長期的な社会変化と短期的な政治変動の影響」（39）
　「「ヨーロッパ」といっても、個別の状況の差異はかなり大きい」（42）
　「フランス」「「国民」統一の基礎としては、エスニックな一体性ではなく「共和主義」という理念が何よりも重視された」（43）
　「イギリス」「複合的ネイション構造の漸進的形成」「「最先進国」であることに伴う特殊性」（47）
「明治国家は幕藩体制よりもはるかに集権度の高い統一国家となった」（80）

「それまではゆるやかものにとどまっていた「国民」の一体感を強固化するために、天皇を頂点とする政治的権威の単一ヒエラルキー構造としての確立およびそれを正統化するイデオロギーの大衆レヴェルへの浸透が目指されたが、その道は曲折した」(81)
「近代国家形成と歩みを同じくして形成された国家神道は、一面ではそれまであった民間信仰と一定の連続性をもつことで大衆を動員したが、他面では、多様な民間信仰の土俗性を切り落とし、特定の神々だけを祀るべき対象とすることで、大衆の信仰を国家に吸収しようとした」(82)
「このようにして「国民国家」化が進められる一方、明治国家発足からあまり時間を隔てずに、まず台湾、ついで挑戦を領有するようになり、その後も大陸への進出が続いた。そのため、近代日本においては「国民国家」の形成と「植民地帝国」化とがほぼ同時並行で信仰することになった」(83)
「幾重にも重層化される形で「国民」形成が進められたのである」(84)

４．小熊英二『単一民族神話の起源――〈日本人〉の自画像の系譜』新曜社、1995年。
「戦前の大日本帝国は、多民族帝国であった」(4)
「「日本人」は、いったいいつから、自分たちを単一で均質な民族として描きだしたのであろうか」(5)
「単一民族神話とよばれるものには、二つの側面がある。一つは、「日本国家は同一の言語・文化をもつ日本民族のみから成立している」という、国家の現状認識である。そしてもう一つは、「日本列島には太古から、単一純粋な血統をもつ日本民族だけが生活してきた」という、民族の歴史認識である」(7)

（３）虚構としての民族、ナショナリズムの力
５．小坂井敏晶『民族という虚構』東京大学出版会、2002年。
「民族の本質論的見方を批判」(3)
「人種とは客観的な根拠を持つ自然集団ではなく、人工的に区分された統計的範疇にすぎない」(4)
「分類という行為は、対象の客観的性質のみに依拠して行われるのではない。分類する人間の主観的決定がなければ分類は根本的に不可能なのだ。言い換えるならば、人間の認知様式から自由な観点に立つと、すべての対象の類似度は同じになる」(6)
23 頁の注(6)：「みにくいアヒルの子の定理」「２つの客体をどのようにとってきても、それらが共通に持っている述語の数は同じである」（渡辺慧『知るということ　認知学序説』東京大学出版会、1986年、63 頁）
池田清彦『分類という思想』新潮選書、1992年。

「差異化の運動が同一性を後から構成する」(11)
「同じ集団に属すという感覚を特に持っていなくても、一括して威嚇されるような事態に遭遇するとき、外敵に対する対立項として「我々集団」は構成され、我々が一つの集団に属しているとの認知が生じる」(13)
「ユダヤ人移民によって建設されたイスラエルという国」、「言語・宗教・習慣・身体的特質などに関して多様な背景を持つ人々が集まって成り立っているにもかかわらず単一民族として表象されている」(14)

「同化が著しく進んでいたそのドイツにおいてまさに、反ユダヤ主義は最も激しい形態を出現させ、住民に熱狂的に支持されたのだった」(20)

「距離が近くなればなるほど、境界を保つために差異化の力がより強く作用する様子」「異質性より同質性の方がかえって差別の原因になりやすい傾向は広範に認められる」（21）
「境界が曖昧になればなるほど、境界を保つために差異化のベクトルがより強く働く。人種差別は差異性の問題ではない。その反対に同質性の問題である。差異という与件を原因とするのではなく、同質を差異化する運動のことなのである」
「民族同一性は主観的に生み出される虚構だという立場」（22）

「民族の実体化を戒める」「社会現象と個人心理に還元する試みはしりぞけられる」（31）
「日本人が単一民族だという俗信はいまだ絶えず、日本人論や日本文化論に頻出している」（36）
「同じ民族や肉親の間に生まれる共感や親しみは生物学的与件から生み出されるのではなく、共同生活の経験、過去に一緒に育った記憶、あるいは文化内に広まっている家族概念・規範などという社会的あるいはイデオロギー的要素に起因している」「生みの親を嗅ぎ分ける「野生の嗅覚」は動物にも備わっていない」（40）、「血縁という概念は本来、主観的なものであり、社会的に構成される虚構の産物にすぎない」（41）

「自らがどこからきたかを知り、記憶し、場合によっては捏造する欲望が前提されて初めて、血縁概念が我々の生活において意味を持つようになる。つまり血縁や民族は集団的記憶と密接な関わりを持っている」（41）
「虚構の物語を無意識に作成し、断続的現象群を常に同一化する運動がなければ、連続的な様相が我々の前に現れることはあり得ない」（52）、「虚構の物語として集団同一性が各瞬間ごとに構成・再構成されるプロセスの解明」（52-53）
「民族は虚構によって支えられなければ成立し得ない現象だが、我々の生存を根底から規定している現実でもある」、「虚構と現実とを二つの対立概念として捉える発想自体が誤まり」（59）、「信念が現実を創出するこの循環現象」（60）
「第一に、虚構は信じられることにより現実の力を生み出すということ、第二に、虚構と現実は不可分に結びつき、虚構に支えらない現実は存在しないということ、そして第三に、虚構が現実として機能するためには、世界を構成する人間自身に対して虚構仕組みが隠蔽される必要があるということだった」（74）
↓
・個人主義の陥穽、脳という虚構作成装置、意識という物語、事実とは何か
・契約としての集団的責任、社会契約論の敗北、個人主義と全体主義の共犯関係
・開かれた共同体概念
↓

６．神話・物語の意味、宗教にとって神話・民族とは何か。

物語の規範・モデルとしての宗教、物語素材の源泉としての宗教
宗教は閉じた物語を克服し、開かれた共同体の物語を語りうるか？

（４）なぜ、民族か？　アジアのキリスト教とナショナリズム

７．蓮實重彦・山内昌之編『いま、なぜ民族か』東京大学出版会、1994年。

「冷戦終了後に国家体制としての共産主義が崩壊してから、世界的にかなり共通した紛争として民族問題が現れている」「問題解決のシナリオを提示してほしい、という要求」（1、山内昌之「序章　民族問題をどう理解すべきか」）
「「民族関係論」ともいうべき、新しい先端的な学問分野や方法論を開拓する必要があるかもしれない」（3）

↓

８．ナショナリズムとキリスト教、双方向的議論。

東アジアの近代化という歴史的文脈における民族、民族主義の多様な現象形態

アジアのキリスト教の多様性の指標としての民族・国民国家

民族との関わりでキリスト教の多様性を理解する、と同時に、キリスト教との関係からナショナリズムの多様性を分析する。

東アジアの他者としてのキリスト教、同質性としての民族を生成させるメカニズムにおける異質性としてのキリスト教、「キリスト教は西洋の宗教である」との言説の民族主義の文脈での機能。

↓

９．日本、韓国、中国の比較研究

日本と韓国を両端としたスペクトル、その中に中国を位置づける。

国民国家形成の二つの道

日本：西洋（非東洋）への対抗性における国民・民族の生成

「古い」伝統の新たな構築（創出される伝統・物語）

韓国・中国：日本（非西洋）への対抗性における国民・民族の生成

韓国：反日本的勢力の一致、その中におけるキリスト教の位置

中国：西洋（キリスト教）も日本も対抗すべき敵

↓

中国のキリスト教の二つの可能性

公的な宗教政策（中国的な民族主義、漢民族主義？？）に適合する、公的な宗教政策に対抗する（中国的な民族主義への批判的視点の生成）

10．キリスト教は民族・国民国家を超越するか？

Yes 、そして No

11．普遍・世界宗教（→普遍救済論へ）という理念と制度化された宗教の現実。

二つの J とは何か

自己超越的民族主義と普遍主義の自己相対化（自己限定化）の二重の運動

↓

閉じることによって開く

二つのレベルの交差